炷合傳小箇條

狩 9
1338
11

目録

一 炷合香之傳并真行草灰之事　此一ヶ條ハ別ニ記
一 同香盆之飾并ふくさの事
一 同香袋同緒かざり
一 折枝袋餝りの事
一 思羽包かざり様之事
一 源氏図かざりの事
一 盤物餝之事
一 乱箱大小餝様之事

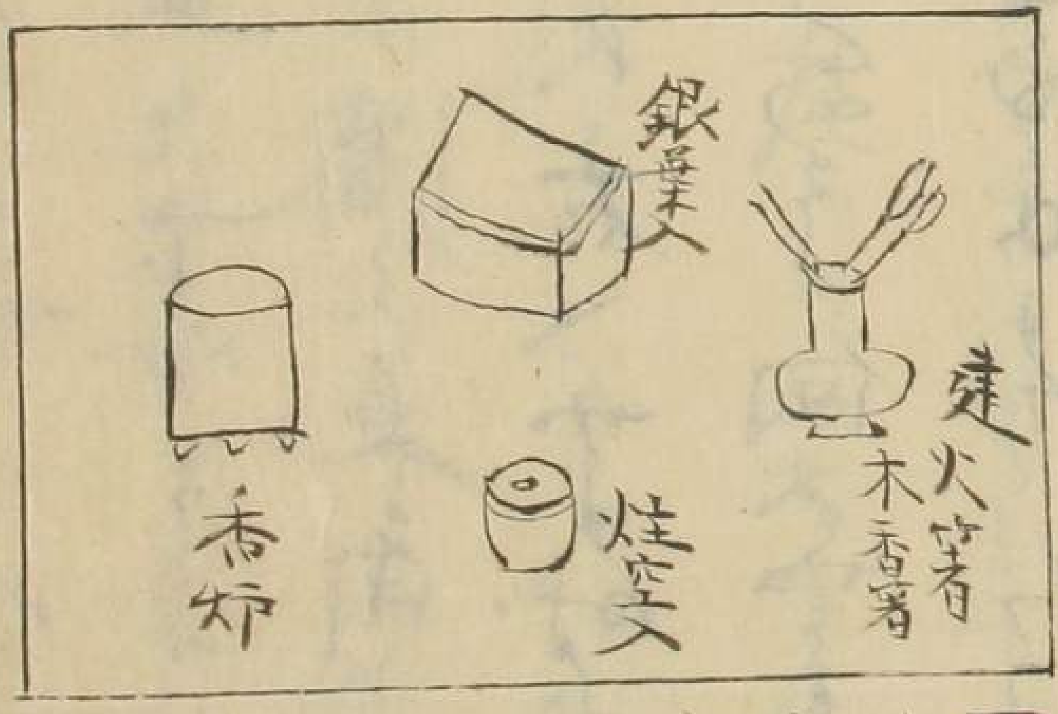
門 ヲ多9
號 1338
巻 11

一 十種香箱錺棚之事
一 同拝見所之事
一 同飾もまし棚之事
一 袋棚飾り并別名之事
一 紹鷗棚錺并別名之事
一 二重棚錺并三重棚錺之事
一 書院棚錺かりの事
一 蘭箱かさりの事
合 拾六ヶ條

炷合香之傳并真行草灰之事

一 香盆長盆を用錺り棚図のこと

右錺所ハ床の棚之三ツより左ハ料紙硯水引ものせ錺り是式ハ小座敷ならハ様子香炉へ火を入灰をして持出てより時宜よろしく候 又座敷広ならハ棚よ床へも錺りかさり時は志野棚を出し錺付候てもよし香盆上香盆右の棚へ料紙硯水引袋の上へ居同家地板へ小かさね炷の家袋の内へふくさにて包之候よし



灰之事ハ前紙炷合手前之式の内よ認かた略す

一香盆の事長盆と臺子用足の有盆を客より足
有盆を中へ上て又扱ふ長盆を下さまにて又把る
舟の心なり其より隋くやかて漕るよ角と角
ミく持廻して香を揃てきつく右へむけ時に右を
くるまき左へやり時て左をくるまき向へやりを流
まうに今同根角と角とをなるをくり廻し
往復して角へ手を付押出してきつく受人へ
銘紙の外を手を出し一寸あまりを前へきつく

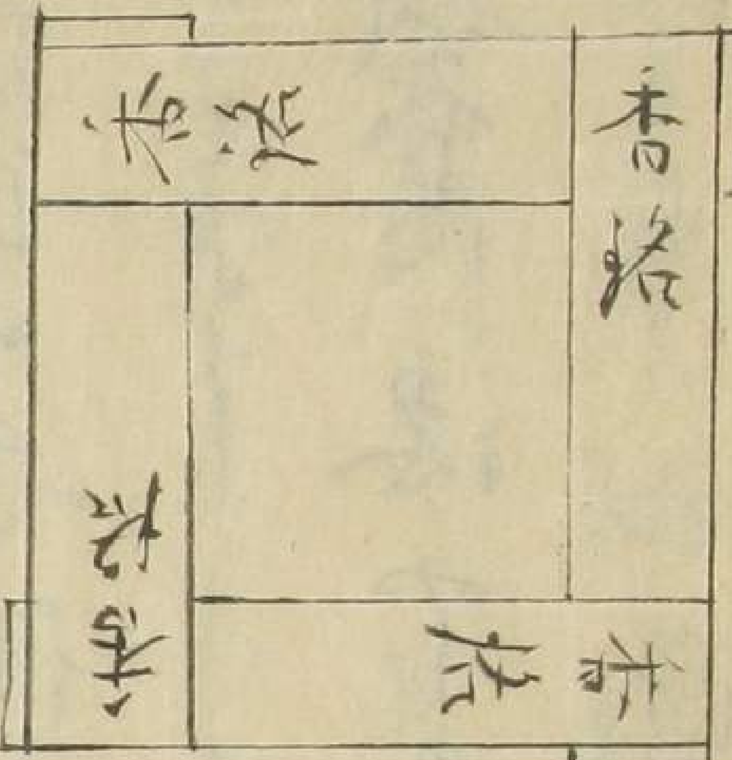
人手をつかつ相伴人へ流れしてあるまで
秘あへつ出して香を嗅廻し但しも人ニ不限
○香盆を拭事濃茶の遣ふ袱紗ほどきて左の
手と盆へ添へかし左手上て左りのふちを向よ
よりあへ拭ひ人すけ拭て中拭へ左きみ向の
ふちを左りの角より右の角へ拭ひ扱て右の縁
の向の角より前へ拭ひ中をも三の字と書てく
左りの向角より三つに拭ひ其ふくさ持かへ右のふち

を帛にて持之人下におく事し太のごとく拭ふべし
国の字の心ある其後にていふべき大功有人ならで
一国二国をも下されし半形に拭ふ東山殿乃束
備国論して合戦志かる止時なき忠功有大名へ進
てまゐらするを後まて忠功有人へまゐらせ下されける
されしかは結の絵名へ價のまゝ下付盆拭ふ名物の
若狭盆柄の事無きいつまても莫大の價付しく
由を可給代りし功有人々へまゐらせ下しおかれ候

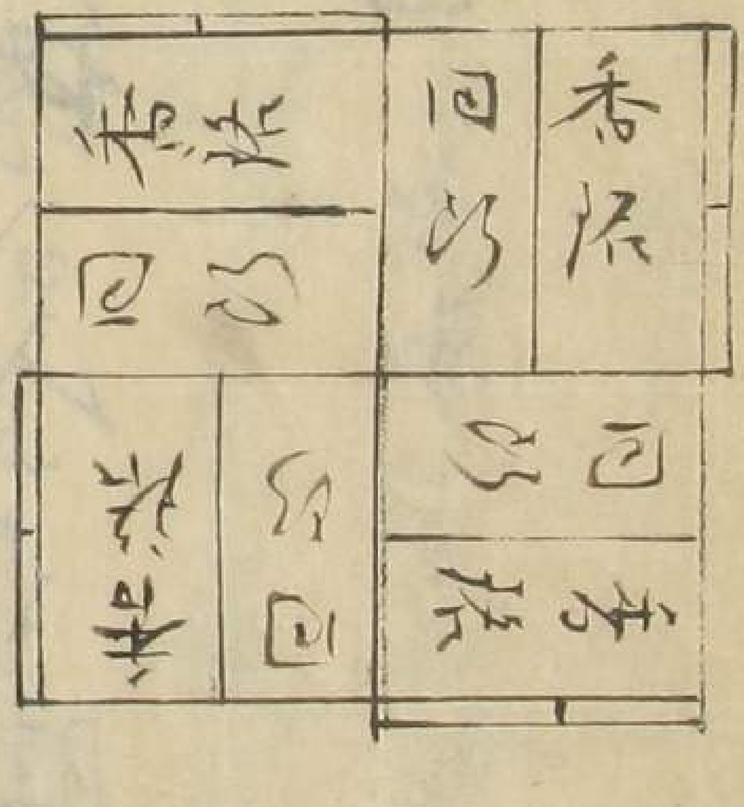
国の字の形ちに拭ふ事もかなはす猶ゝ心安
国の字に拭ひ候人も人をえらみ申されはしたまはり
せん其心にて可拭なり扨帛を始め
懐中して膝に下ろして又挟みへ直してば
盆拭ひ以て後に左りの袂へ入ても膝へ
下しをきよし
一香袋内捻の半ニ香包と共つゝの如く
組合あるし如図

如此紐也

かやうに紐にて入るゝは後より入れ出すとも散乱せん
しても如此して八九枚も志野袋へ入るゝ時ハ紐合
なども不足なり右両時ハ香袋もならず用の結
地にて様先代宗先好みの大寄にも香の好みの香
袋にて大事なる限なきを上る人志野袋



二色でなくて
組合すれハ
如此組なり



を用ゆれて寧ゆて見出し其上ハ限なきを上達へし
一指枝袋 鉄枝の事 是も東福門院様御好
あり此東富袋の形ちにて少々ちかひあり 志ま
依て一ツ錺にゆれて其ねふ袋ニなり 飾枝 本枝
の折打ちつけ其月の何りの花をさし上なり 常の座
へ十あつへき事勿論一つ座なり 是ハ後世の好み
又ハ附書院或ハ志野棚の袋の上にて違棚よし 草花ニ不拘
飾ならハ何も大曲にて而ハ小曲にて 大曲八寸 小曲七寸 三合一分なり

まず紐にてみつけて三合にも大曲にても真曲にても其附ては
たつしてかさりと小曲にしてあり
指枝袋を五緒と角に入川花し飾りも深
香炉の蓋として其上にも飾る也花杉と香を入て其事
あり

一思羽包錯杖の事　是も東福門院様御好之
昔より倭の香木を入る是へ入れ添て緑絶ることなく入念
嗅ぐる田曲のねらひふ天人の渦を付る旅人は
香を聞付て入てきらん為なり飾　れ

指枝袋は同じ形似て床柱へ付る香炉の蓋の上に
並べ事例し花大中小と三品にして大にて色紙を入
るにもあり小にて十種香に用ゆ入て有男女ともに用る也
其間あり

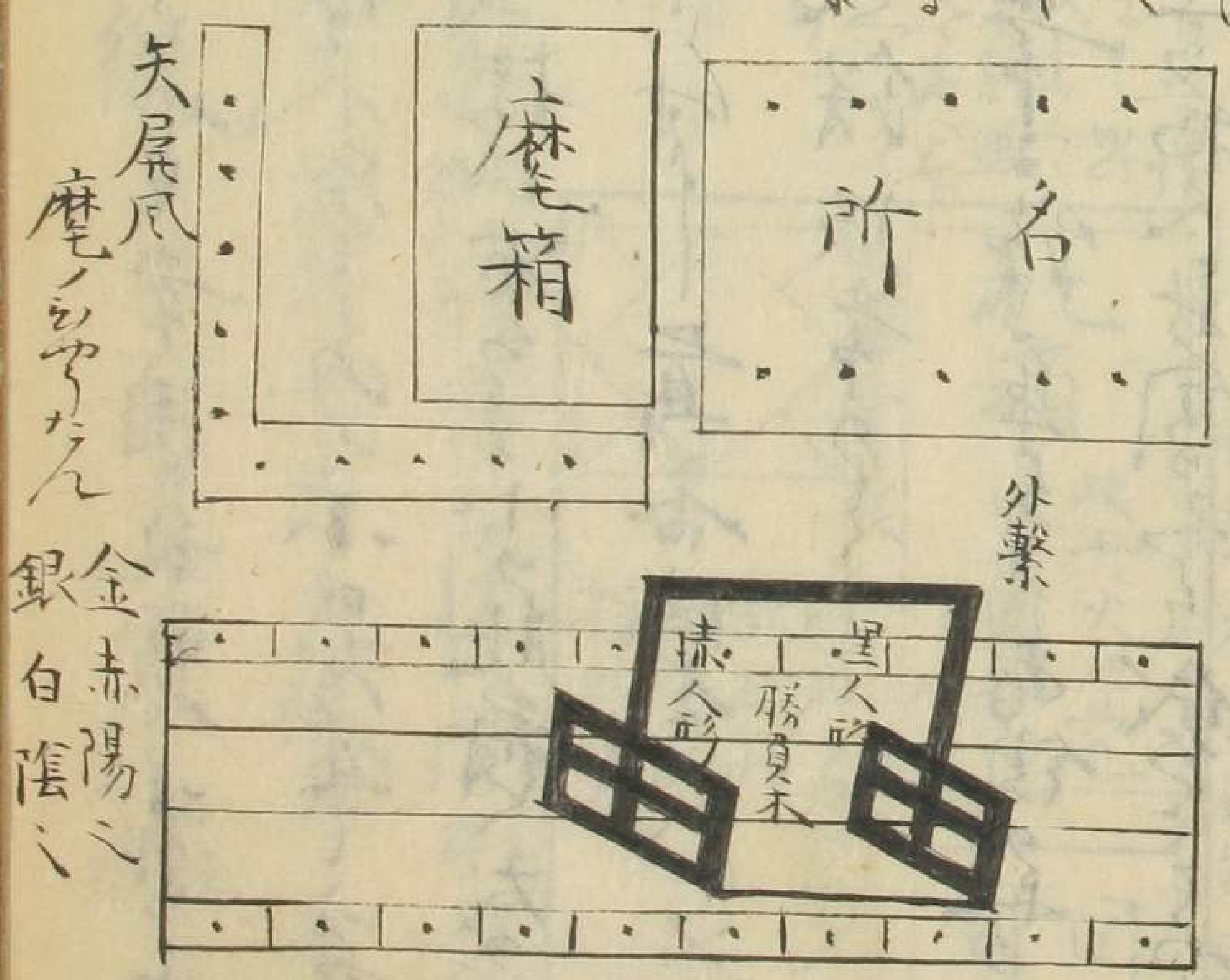
一源氏図飾の事　勅筆震翰は文字のもの深秀
の扇本にて軸盆へのせてこれを用ひ　堂上方の名目にて書物に深秀の
とのるにいふかりし花文字として加様の深秀の尽す也
何を硯箱の傍にて錯の事なり客席へ直して

亭子のせ飾りありて床之間の所にて四方にて主ハ向ひ
何者の床前にて是非何茶にておろし茶之出さ
ことに其時主も従服にて常まで以ちれ出て茶之えて
三種ニ客ニ迄て客ふるひあり主おろし出まする時
客より亭主も志人にも心得も客も起居を勤めて
さゆうにて法見を崇り其飾り之ま目を付くるに様子
して飾所の曲尺合おこし能く見定め人血共におろし
次ハ一礼して見て廻りまするに見るなるは帳ハ其

無て茶器ハ中にて見るなり勿論是は後ま
思ね香袋にも主人なとも此鎖の所にて亭子のせて
錺ることもあり花一つ掛るなり香木なとハ此鎖の所に
小サく一つ小の志野袋に入亭子のせ錺るなり
一盤物飾之事　諸錺りしよふに如斯入候
錺りも又用意錺りもあり以ますあり幅并板等
への生半なり其從ニて客の饗無の為ニ餝りし
十種なとの外諸錺りするにて何ノ其なし

呑餝ハ見るのみ其ホとに不用ニ仕廻ふべき呑
所ニ定置きぬもよし　盤物ニ終りたる時に
長床ニ飾るべき儀餝りなきも主方の負け
なり左様の時ハ何ニても一色餝り済ちて後
餝りなしても無心得ニ而出し　方用
なり　其ニかまひ出て　餝り物て　備牢
右の白ハ第一の女なる之
盤物備餝如左

先競馬の馬を二枚重て前ハ
立其上ハ外繋ハ赤馬を上座里方を
下座真負中ニ勝負の木を立て矢
屛風ニて客付ておし廻し
其内ニ麈箱を置て其右に
名所の作り花の臺を横に置
なり
化春夏を揃て前秋冬ハ
江戸家て前るもちふ時て
何時も揃上るなり
競馬ニ而赤る上座里方下座馬
ニ而上座駈るなり矢数の矢を
上座矢を上座ゟ下座へ
行なり



一乱箱大小飾様之事　大ハなくて常用の乱箱也小ハ小き
常の乱箱の内ニ入子ニなる様ニ作るもの也小の香具と云て
十種香箱なとも何れも一式揃ひ有なり小の乱箱ハ大の香
具組入てハ無之香盤かきはなし聞香炷香の数又ハ
小ぶり成一品一事ならの時ハ餝様常のことし

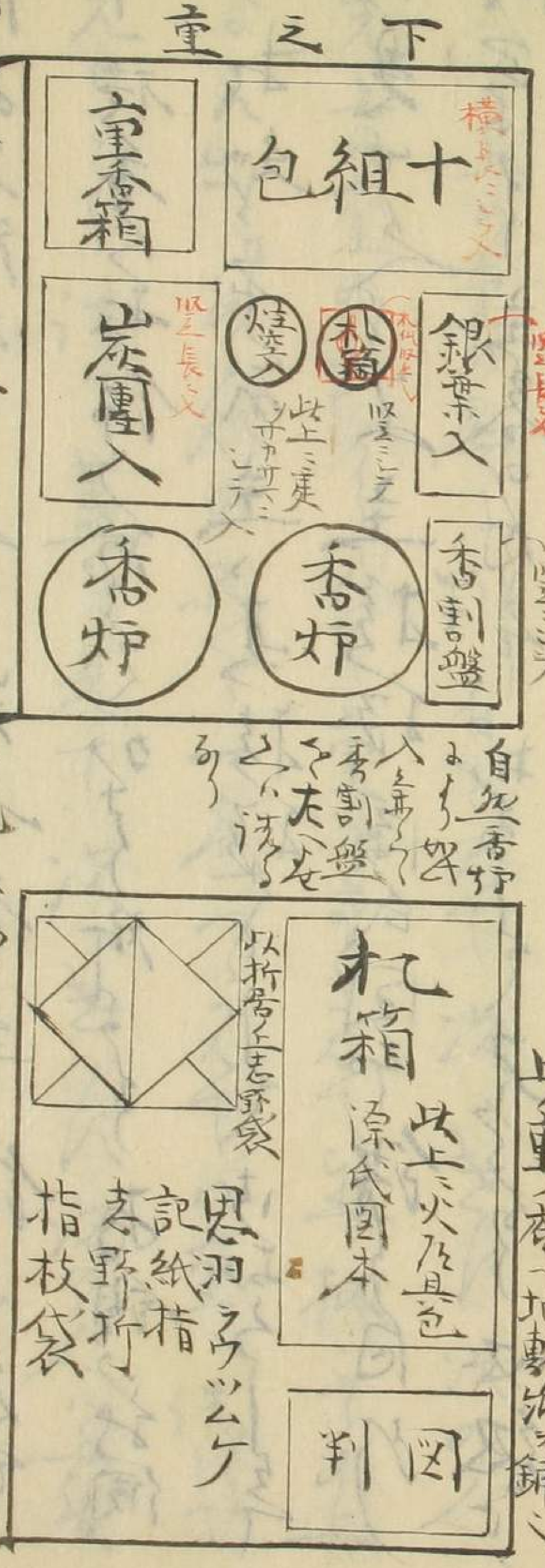
一十種香箱飾様之事　常ニ飾る事なり　香鑑のことく又
新個のことくしても餝るなり　一ツ袖之新個のことく袋ニ入れし
是箱ハ之餝乱箱ニ　新個なして乱箱ハ入様飾へし

十種香箱詰様左の図のことし

上ノ重ノ底へハ地敷紙を鋪く

火取香ハ札箱と折居の間ニ入
香札長ケハ火九之包ニ入

下之重



詰る品斯の如し　札箱　折居　十組包
源氏図本寸分
帙ニ入　板ニ入　建て　網ニ入　大ノ香具ニて包紙ニ　香炉
ニて蓋袋あり　香炉袋　縦ニして　真なり　金襴ニて

次ニ帰りて名物の氣をきゝ給ふとあり　右の通
に詰させ給ひて　つまらん
一同おの〳〵所定ニ出　先香席ニ至り飾らせて
十種香ノ飾りあるゝ　かまり所にて　お銀の封筒
りされ知り申す也　主ハ其銀頼として持おろしニ
お見せ入ても　主銀頼源氏図ヲ餝り目録
時宜にて主客のかはて　おろして入るゝ　必絵に
持参して　扱入ら給ひて　先蓋を取入て　御覧

上の重の香を一包つゝみて　蓋へのせしむ　出し出
る　上の重の組ニ判有をみて　次ニきたる　次の人
先上の重の判をみて　重をよくみて盆扱ふ　其上
に出しある紙の香を　一包つゝみて　重へ結びて
其の如く　詰て　蓋を見て　次へきかしむ　次の人盆を
の如く　蓋をうけて　重のとめて　蓋へ出しく
上の重をとりてあり　其次ニて　二客の如し　末座まで
めぐりて据つて　末座の人　法の如く　詰て　上座へ

返さるゝ 但亭主盃にて先ニ聞候ハヽ先ニ聞申候て上座へ返すへし 捌上座の人まて
盃をまハし其盃ハ下の方より有物とて出し其盃ハ宅
くゝして下の方へ順々に次へ廻して次第にくりて上座
より盃へのせん〃下の重の物まへハ一色ツヽ入て重ハ
入くしく 盃を見て一炷からは聞香半備へ
始のことし 不残終りて上座へ返し名乗如法紙
紙ハ重香の紙の如く 左上右下重ね遣へ
主へ返し 捌役有て遣し事ニ候是まて

何れも一紙なり 亭主返ニ主請て請取
入乱紙ハ常のことく紙入て持出床に相て
錯り文より香催半常のことし 十種香箱
飾りの時ハ外の紙香ハ不出 内十紙の内より出
半より 尤十紙包に不残香紙無半に
但餝りに盤物等飾り不出ハ盤物の
時に美文ものニ心得有之事
一同紙揃事 常ハ不用 十種香等錯り時

に限りて結ふ結ひとも明りむすびは道具の
編緒の紐結様と同し事也丈夫なる如常紐を結
こしらへしに解ることも有事
一袋棚飾 糸別名は無し 袋棚を今以て志野
棚の事なり 茶人宗旨より袋棚を申すなり 又志野棚を申す也 袋の上にて重キ系
の飾なすに用也之 袋ト云ハあげ落しの戸の有
ゆゑ和の袋なり今傍にてけんどん蓋を はげ取りし事也 古名を中棚と云南棚
是を上棚と云ふこと 天子に限りて用ゆる也

真行を正面棚の代りに四季棚を用ゆ依て四季棚
を真とす不盡来に上るなり去るに依て四季棚を一名
卓棚といふ桐の志野棚ハ宗旦茶事に用ゆる為に桐
にて作りし也已後香に桐の方を用ゆ本式志野棚
を塗り素り袋の紙に献ずる也是をいふ也中
棚と唱ゆる也何程結構なり四季棚の外にも床に
上る事定法なり袋棚飾り方色々あり袋の紙
明ケてあしらへ肉筆飾り有しみ飾て明てみる

茗下の湯へ居りあるは明る次第あり高之
袖を入置ても見出しよく候にさの置あり袋
の上重き場所也へ 枝枝袋にも置あり

一 紹鴎棚錺之別名も有 紹鴎棚又ハ下棚にハ
本式にて唐素四方総角あり袋ハ真中に仕切
ありて二枚ての献あり 掛金あり 天井の上
にて何も不置候し 十段の脇に料紙硯を置し
執筆の用意候具を中に置 下の袋にて 右へ

座敷へ入左へ地袋大取の為入置候 古代
の棚にて向て左の角に小棚有 取天井と不開候ハ
天子御会の時に 下棚に香炉として御香炉
出来ぬて 香盆への也 袖なきに帛まで持天井へ
あけ置 又 海へこうにも可ゐ 法然位の人 天井の
上の香炉を運ぶ事 天子の御道具を両棚
宮方 其外の摂関伴公卿の御道具ハ中棚 下棚
に香炉の用ありし 今のことし 略候し

袋も二枚の外にかせしを茶人紹鴎の好なり
また紹鴎棚といふ紹鴎は初名武田因幡守後武野と改大黒庵と号す者也
門人まで香をもち嗜し人なれは茶にも香をも
用られしなり其余は依て南席にも紹鴎棚にて
香棚を用ゆる然とも只茶をもて唐棗を紹鴎棚
作り四方へ切はづして下ケ袋を飾りて
と唱へ其下棚にかざるなり
一二重棚 三重棚 錺る事半 二重棚といふは南時

茶に用ゆる三重棚の半分なり 三重棚といふは今一重ある
き棚なり 元は唐木或は塗四隅は総角ありて
錺る事小く丈ケ有る棚にて重きありて上へのせ
かし 目方軽き物を上へのせては 但道具の
格の軽重によりて利用道理にて必ずなし
丸棚四方棚は元は唐木なり 唐木にて作る物は
卓といふ 桐にて作るを棚といふ 総て元卓の名
有なり 桐にて作りしは元来床にも上る所小卓

も同じ趣して棚にてハ床ハ上よりハ卓を立る
床ハ上よりハ小卓元の事ハ唐木作にて茶事に
用ひ候茶人家にても小卓とて今桐にて作る
丸棚とて丸卓とて入有之候とて知らさる候
説なり
一 書院棚 錯棚と申 書院棚にて棚有
なるほど書院に付く棚の事なり丸柱に床
に用申事書院の伏木角に垂ケ條にて之

無し違棚草書にて床に付すして高くして
草書に付く付棚にて付るにて遠くして草
書にて不付なり是も附書院取りなし床の有也
為すに之違棚ハ草書にて付無して棚も城
楼棚真なり真中にて高く高さ子草書に
有之と一として床の方と二として縫棚の方と
三としてなり一床棚も床の高き方と一として
なり直棚にても同じ床の方と一として以

かすみあり

一蘭筒錯し年 先ハ香席ニかましてか序次
等六ヶ度时の為ニ致させ著本ニ而出文
机下ニ六角ニ致して亀甲とかくらなり錺
る所を何とても小曲人の場所ニ呼ぶ
人

右姓合小箇條之闘香幹吾貞室ニ
相尋書留置所無相違者也

享保九年己季秋

催陽堂
秦豊綿

右之書催陽堂豊綿所持之本を以写之者也

温故堂

弘化三丙午年五月上京之節於幹吾貞晴先生
之館受姓合之傳記録別蔵之同六月盤閲
之上得温故堂所持之姓合傳覚書写之者也
覚書都テ三冊也

貞亮十才 月将